

## 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科	研究 1-1

お茶の水女子大学

## 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科	期待される水準にある	期待される水準を上回る	改善、向上している

## 注目すべき質の向上

## 文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科

- 平成25年度の国立大学のミッションの再定義を踏まえ、理論物理学や有機合成化学での新領域の開拓、シミュレーション科学分野や生命科学等の領域で、新たな研究課題に挑戦している。
- 「最適輸送理論に基づく熱分布の研究」、「有機化合物の三次元構造制御と創薬化学への展開」等、若手研究員による研究成果がみられる。



**文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科**

I 研究の水準 ..... 研究 1-2

II 質の向上度 ..... 研究 1-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の科学研究費助成事業の採択金額は約2億円から約2億5,000万円の間を推移している。特任教員を除く教員一人当たりの受入額は平均120万円であり、そのうち文系の人間発達科学専攻とジェンダー社会科学専攻の教員一人当たりの採択金額が高くなっている。
- 平成22年度から平成26年度の学会発表数は、国内は合計2,578件（一人当たり年度平均14.6件）、国外は合計678件（一人当たり年度平均3.8件）となっており、理学専攻及び人間発達科学専攻の発表数が多くなっている。
- 平成25年度から平成27年度に企業から3件の寄附を受け入れ、2件の寄附講座を開設している。
- 主に若手研究者を対象とした科研費パワーアップセミナーやメンター制度による申請内容の相談等を継続的に実施している。また、平成25年度から平成27年度までの3年間で総計65名の日本学術振興会特別研究員を受け入れている。

以上の状況等及び文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に解析学基礎、生物物理・化学物理・ソフトマターの物理の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、解析学基礎の「最適輸送理論に基づく熱分布の研究」、生物物理・化学物理・ソフトマターの物理の「印象派物理学の手法による滴・バブル・濡れ、粉粒体、物質強度に関する研究」がある。特に「最適輸送理論に基づく熱分布の研究」は、エントロピー汎関数の最適輸送が定める勾配流とエネルギー汎関数の勾配流という熱分布のふたつの定式化が、コンパクト Alexandrov 空間において一致することを証明したもので、平成25年度科学技

術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞、2011 年度日本数学会賞建部賢弘賞特別賞を受賞している。

- 特徴的な研究業績として、有機化学の「有機化合物の三次元構造制御と創薬化学への展開」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般の細目において卓越した研究成果があり、教育社会学、医療系薬学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「『線の音楽』の理論による芸術音楽の作曲」がある。

以上の状況等及び文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、文教育学部・理学部・生活科学部・人間文化創成科学研究科の専任教員数は177名、提出された研究業績数は43件となっている。

学術面では、提出された研究業績36件（延べ72件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績8件（延べ16件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は7割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目 I 「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間の科学研究費助成事業の受入額は、約 2 億円から約 2 億 5,000 万円の間を維持している。
- 平成 25 年度の国立大学のミッションの再定義を踏まえ、理論物理学や有機合成化学での新領域の開拓、シミュレーション科学分野や生命科学等の領域で、新たな研究課題に挑戦している。
- 研究活動の体制の強化のため、平成 27 年度より人間文化創成科学研究科教員の所属を基幹研究院に集約することにより、当該大学固有の伝統的分野であるジェンダー研究、人間発達学研究や、研究ポテンシャルの高い分野への重点化を可能としている。特に、女性のリーダーシップ育成と男女共同参画社会の実現に貢献する教育研究拠点としてグローバル女性リーダー育成研究機構を同年度に設置し、予算や設備等の学内資源の重点的配分を行っている。

分析項目 II 「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 解析学基礎、生物物理・化学物理・ソフトマターの物理、衣・住生活学、食生活学、ジェンダー、芸術一般、アジア史・アフリカ史、物理化学、有機化学、臨床心理学、そのほか多岐にわたる細目で優れたな研究成果がある。
- 「最適輸送理論に基づく熱分布の研究」、「有機化合物の三次元構造制御と創薬化学への展開」等、若手研究者による研究成果がみられる。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 平成 25 年度の国立大学のミッションの再定義を踏まえ、理論物理学や有機合成化学での新領域の開拓、シミュレーション科学分野や生命科学等の領域で、新たな研究課題に挑戦している。
- 「最適輸送理論に基づく熱分布の研究」、「有機化合物の三次元構造制御と創薬化学への展開」等、若手研究員による研究成果がみられる。